

来ませ 甘き死の時よ BWV165

1. アリア アルト

来ませ 甘き死の時よ
わが霊が獅子の口より出る蜜を食する時よ
別れの時を甘くして引き止めないで
光よ 救い主とあいさつを交わす時よ

2. 朗唱 テノール

世の喜びはわたしに重荷となり
砂糖ははかない光を放つ毒独
バラをつもうとすれば刺に刺され
心の痛みとなる。
青白い死は昇りゆくあけぼのの光
栄光と至福に輝く太陽に
わたしをつれていく。
ゆえに心の底から終わりの時を求める。
喜んでキリストにそばに行く。
喜んでわかれを告げん。

3. アリア テノール

わが望み救い主に会い
キリストのそばに居ること。
私は死んで砕かれて
灰と土になっても
魂の美しい輝きは
天使のように照り輝かん。

4. 朗唱 アルト

すべては終わった。
この世よさらば
今は慰めをうけ
イエスのうでに抱かれて
やさしき眠りに憩わん。
冷たい墓はバラでおおわれ、
わたしをよび覚ましみ国に導くまで
死はわたしを神から引き裂くことはない。
来ませ 喜びの死の日、
終わりの時を告げる鐘を打て

5. 合唱

み心ならば
からだの重荷が 今日にも地の上に満ち
からだの客なる霊が み国の甘美な喜びのうちに、
死なぬ者となることを願う。
イエス来ませ 私を導き、 を助けませ。
これが最期の言葉とならん。

6. コラール

たとえ肉体が食い尽くされようとも
キリストによりて かならずよみがえらん
太陽の光を放ち 御国の喜びに
苦しみもなくなり 死は一体なんなのか。

初演は1715年とみられている。バッハ30歳の時。まだトマス教会音楽監督に就任する前のワイマール時代。

歌詞はルカ福音書にあるナインの若者をよみがえらせた箇所。死者のよみがえりは現世的な肉体の蘇生ではなく、霊のからだによみがえる。死へのあこがれも永遠の至福に至る欲求と考えられた。

ザーモン・フランクの詩は甘美な死を心から待望する理由を観想的に説明していく。（「バッハ・カンタータ」H.リリンク）

「肉体を宿とする霊」によって人は生きるなどと哲学的でもある。

わたしは、死を「甘美な喜び」とする中世の文学や音楽、絵画、思想に触れ、どんな意味だろうかと思ってきた。

最近、サムソンの故事に結び付けた解釈を知った。

サムソンは襲ってくる獅子（口語訳ではライオン）を倒して引き裂いた。その後どうなった見に行ったところ、

死体に蜜蜂の群れがいて、蜜があった。彼らはその蜂蜜をたべた。（旧約聖書士師記14）

この話は、イエスの十字架の死とその死の贖いによって、信じる者に永遠の命が与えられる、と結びつけられて、

死が甘美な喜びを与えると説いた。またはちみつの蜜のように甘いと。

比喩的というか寓喩的解釈というか、そういう解釈が行われた時代があった。